

抄 録

第15回山口県腎臓病研究会

日 時：平成21年2月19日（木）18：30～
 場 所：山口グランドホテル
 共 催：山口県腎臓病研究会
 興和創薬株式会社

一般演題 I

座長 山口大学医学部 第二内科

作村俊浩 先生

1. 2型糖尿病ラットの糖尿病性腎症に対する5-HT_{2A}受容体拮抗薬の効果

山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学,
 山口大学医学部附属病院臨床試験支援センター¹⁾

○高橋規文, 作村俊浩, 岡本匡史, 池上直慶,
 松崎益徳, 梅本誠治¹⁾

【背景・目的】5-HT_{2A}受容体の選択的拮抗薬である塩酸サルボグレラートは、早期糖尿病性腎症におけるアルブミン尿減少効果などが報告されているがその機序には不明な所が多い。今回我々は2型糖尿病ラットのOLETF rat に対し早期よりの塩酸サルボグレラート投与を行い、抗蛋白尿効果を評価すると共に、糸球体病理組織に与える影響を検討した。

【実験】OLETFラットに塩酸サルボグレラートの経口投与を16～38週齢の間行い、体重、血圧、蓄尿蛋白量の測定を行った。摘出した腎臓にはPAS染色およびP22phox等の免疫染色を行った。

【結果】体重などには有意差を認めなかったが蛋白尿の減少効果を認めた。病理組織的には糸球体硬化の抑制を認めた。また、免疫染色において塩酸サルボグレラート投与群で酸化ストレス系の発現低下を認めた。

【結語】塩酸サルボグレラートの早期よりの投与により、抗蛋白尿作用および糸球体硬化抑制作用を示した。機序として糸球体における酸化ストレスの産生系の抑制が示唆された。

2. Gitelman症候群の1例

山口大学医学部 泌尿器科,

山口大学医学部 第三内科¹⁾

○廣吉俊弥, 金岡源浩, 小松宏卓, 福田昌史,
 内山浩一, 土田昌弘, 松山豪泰, 太田康晴¹⁾

症例は37歳、女性。2006年10月に扁桃炎にて当院耳鼻科入院中に白血球上昇を認め、当院内科を受診。抗生剤投与により白血球上昇は改善するも、顕微鏡的血尿とクレアチニンの上昇が持続するため、2008年6月12日当科を紹介受診。溶連菌感染後の腎炎もしくはIgA腎症を疑い、腎生検を施行した。病理学的所見は傍糸球体装置の過形成を認め、低K血漿、低Cl血漿、代謝性アルカローシス、高レニン血漿、高アルドステロン血漿などの所見よりGitelman症候群と診断した。扁桃炎の改善とともに、蛋白尿、尿潜血は消失、腎機能も改善し、現在スピロノラクトン投与とK補充を行い経過は良好である。

3. ステロイド抵抗性ネフローゼ症候群を呈したC1q腎症の4歳女児例

山口大学医学部 小児科

○白石昌弘, 古川 漸

6月中旬から眼瞼及び下肢の浮腫が出現し近医受診。検尿で蛋白(3+)、潜血(3+)であり7月1日当科へ紹介され入院した。血清アルブミン1.5g/dl、血清コレステロール494mg/dl、血清補体価やや上昇、尿蛋白363mg/dlでありネフローゼ症候群としてプレドニン2mg/kgで治療開始した。4週間経過も寛解得られず腎生検施行。光学顕微鏡所見でびまん性にメサンギウム増殖があり、蛍光抗体法で同部位にC1q, IgG, C3の沈着を認めC1q腎症と診断した。ステロイドパルス療法3クール施行したが効果なく、8月下旬からネオール、プレドニン併用治療開始。シクロスポリン血中濃度をトラフで120ng/mlとしたが、寛解得られず11月でネオール中止。エンドキサン2mg/kg/dayに変更したが、12週間投与終了時点で寛解は得られていない。C1q腎症では60%程度がネフローゼ症候群を呈し、その80%がステロイド抵抗性やステロイド依存性になる

とされている。40%には血尿も認め、種々の治療にもかかわらず10%が腎不全となり予後不良な疾患である。

一般演題Ⅱ

座長 岩国市医療センター医師会病院 腎内科
福田雅通 先生

4. 急速進行性腎炎を来したChurg-Strauss症候群の1例

徳山中央病院 腎総合医療センター
○西嶋 淳, 松村正文, 荒巻和伸, 三井 博,
那須誉人, 林田重昭

症例は67歳, 男性。数年前より喘息加療中であったが, 2008年5月の発熱後に, 四肢末梢の痺れ・筋力低下が出現。当院脳神経センターにて著明な好酸球増加と多発性末梢神経炎を認め, Churg-Strauss症候群(CSS)の診断にてステロイド治療を行われた。腎機能悪化があり当科にて経皮的腎生検施行。病理組織は好酸球の浸潤を伴い半月体形成を認める急速進行性腎炎であった。ステロイドパルスを行い腎機能は改善し, 563 EUと高値であったMPO-ANCAも正常化しており, 現在もステロイド内服にてコントロール中である。

5. 当院におけるPTRA症例の検討

済生会下関総合病院 腎臓内科
○新田 豊, 和泉隆平, 伊藤真一, 南園宗子,
藤田建次, 大藪靖彦

【背景】近年, 世界的に末期腎不全患者は増加を示している。高齢者や糖尿病患者の増加, メタボリック症候群が背景に有ると考えられ, 同時に原因として腎動脈疾患患者の増加も危惧されている。【目的】今回我々は, 当院での自験例について腎動脈狭窄症例の原因, 診断, 治療および予後をまとめたので報告する。【症例】今回我々は, 2007年1月から2008年10月までに当院でPTRA; 経皮的腎動脈形成術を経験した症例につき, 診断およびPTRA後の患者状態に関し検討を行った。【結果】この期間にPTRA

を施行したのは9例。年齢分布は17歳から59歳, 男女比は7; 2であった。内, 粥状硬化性は5例, 繊維筋性を疑いは4例であった。POBA対応は2例, ステント留置例は7例であった。全例で血圧の安定を得, 降圧剤の中止を得たのは2例で他の症例も全例降圧剤の減量を得た。明らかな腎機能の改善を得られたのは4例であった。【まとめ】1. 腎動脈狭窄症と診断し, 血行再建術としてPTRA(経皮的血行再建術)を施行した5例を経験した。2. 1例でコレステロール血栓症の合併を認めたが, 全例で血圧の安定と降圧剤の減量または中止を得られた。3. 高血圧症や腎機能障害患者ではRAS(腎動脈狭窄症)のスクリーニングを積極的に行う必要が有る。

6. 超音波造影剤(レボビスト)を使用した超音波検査に於いてのみ指摘される非典型的膀胱尿管逆流症の1例

独立行政法人国立病院機構岩国医療センター
小児科,
同小児外科¹⁾,
同泌尿器科²⁾,
川崎医科大学 小児外科³⁾
○井上直樹, 矢野康行, 重安良恵, 長岡義晴,
山口和誠, 高田啓介, 守分 正, 小倉 薫¹⁾,
日下信行²⁾, 植村貞繁³⁾

症例は6歳女児, 主訴: 反復性尿路感染症。H2O.2.9発熱, 他に症状なく, 抗生剤内服で解熱。2.22再発熱, 痙攣。白血球増多, CRP高値, 膿尿認め入院。E.coli(ESBL) $10^3/\mu\text{L}$, 左水腎症。CTXで加療。DMSAシンチ左腎cold spot検出, 腎盂腎炎と診断。VCG VURなし。レノグラム: 左排泄遅延。6月, 7月に抗生剤内服中に腎盂腎炎2回罹患。VCG再検でもVUR認めず。レボビスト使用超音波検査で左尿管開口部への逆流を観察。ItVURとして手術。左の尿管口の繰り返す感染のための狭窄あり。逆流の軽微な本例の診断にレボビスト使用超音波検査は有用であった。

7. 膜性腎症へのシクロスポリンの効果に関する考察

岩国市医療センター医師会病院 腎内科

○福田雅通

ネフローゼ症候群を呈する代表的な疾患である膜性腎症（MN）と微小変化型ネフローゼ（MCNS）を比較すると、MNの場合ステロイドを初めとする治療の効果がMCNSほど明確でなく、一部の症例が長い経過で末期腎不全に進行していく一方で、一部では自然治癒がみられる。MNにおける予後不良因子に関してこれまで多くの報告があるが、それらを加味した治療プロトコルの確立は未だ十分とはいえない。ある患者には過剰な治療をせず、またある患者では腎不全への進行を有効に阻止する、MNの治療の困難さがここに集約される。当院では4年前から、ステロイドを含む従来の治療でのコントロールが困難な症例に、シクロスポリン（CyA）による治療を開始した。これまで特発性MN 5例に同治療を行い、例数は少ないものの一定の傾向が見られたので報告する。

特別講演

座長 山口大学大学院医学系研究科 器官病態内科学
教授 松崎益徳 先生

「我国のCKD対策の現況と今後の展望」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科

腎・免疫・内分泌代謝内科学

教授 槇野博史 先生